

子どもの貧困対策としての「地域の教育力」とは何か  
－奄美・沖縄・西表・与那国の事例をとおして考える－

宮城能彦・仲眞みき・山城舞茄

はじめに

本研究は「地域の教育力」とはなにかについて、沖縄の都市や離島や北部地域、そして奄美大島大和村を中心にその現状を調査することによって考察し、「子どもの貧困」に対して地域ができることの可能性を探ることが目的である。

「地域の教育力」の重要性は様々な場面で言及される言葉である。しかし、それはかなり抽象的で現状をよく把握せずに使われることが多く、また、ひとつの「理想」として語られることが少なくない。

地域において、両親や親族以外のものが子どもを一時的に預かるということはかつて普通にあることであった。現在の60歳以上の世代で、「日中は近所のおばあが見てくれていた」という人も多い。しかし現在においては少なくとも都市部ではそういうことはあり得ないだけでなく、近所の子どもが連日泣き叫んでいても児童相談所に通報しないケースも少なくない。

本論では、まず第一章において、沖縄本島の北部や離島そしてかつて琉球であった奄美大島では地域が子育てにどのように関わっているのかという事例をできるだけ具体的に考察する。

また、「べき論」ではなく、現状としては女性が子育てにかかわる比重が大きいことは事実である。女性が地域とどのように関わっているかということは、少なくとも現在においては「地域による子育て」という問題意識にとっては大きなテーマである。従って、第二章においては、女性が活躍している地域の事例をとりあげて考察してみたい。女性が活躍している地域はどのような特徴をもっているのか。あるいは、女性が活躍することによって地域はどのような可能性を持つことができるのかという問題意識である。第3章ではそれらを踏まえ、都市部である那覇市の取り組みを紹介し、なぜ那覇市がこれほどまでに「子育て支援」を行政として行わなければならないのかを歴史的に考察する。

なおこの報告は、宮城が全ての調査に同行し議論した後の指導のもと第一章を仲眞が、第二章を山城が担当した。文責は宮城にある

## 第1章 離島・村落における「地域と子育て」の現状

### 第1節 国頭村与那の事例

#### 1-1 地域の特質

国頭村与那集落は、国頭村西海岸に面する集落である。集落の南側にはヨナタカヒラと呼ばれる険しい坂道がある。現在の与那トンネルやその前の海岸沿いの道路が開通する以前はそのヨナタカヒラを登らなければ、名護方面や国頭村の中心地で役場や商店街がある辺

士名へ行くことはできなかった。

そのために、琉歌『与那の高ひらや汗はてど登る 無蔵に思なせば車とうばる』(訳「与那の坂道は登るのにとっても難儀な山道で汗まみれになる。しかし、愛しい彼女と一緒にときは、平道を歩くようなもの。全く苦にならない」) というものがある。

また、与那の人の気質はユナムダクマと呼ばれ、昔から向上心が高く頭がいい集落として有名である。

### 1-2 地域の人口変化

| 国頭村与那 | 総人口 | 15歳未満 | 15～64歳 | 65歳以上 | 65歳以上の割合 |
|-------|-----|-------|--------|-------|----------|
| 1965  | 518 |       |        |       |          |
| 1985  | 309 | 65    | 170    | 74    | 23.90%   |
| 1995  | 252 | 57    | 121    | 74    | 29.30%   |
| 2000  | 274 | 68    | 132    | 74    | 27%      |
| 2005  | 258 | 49    | 135    | 74    | 28.70%   |
| 2010  | 226 | 26    | 125    | 75    | 33.18%   |
| 2015  | 193 | 17    | 114    | 62    | 32.12%   |

(国勢調査より)

### 1-3. 「地域と子育て」の現状

#### ・おじいおばあのクリスマス会

年々減少していく集落での出生率をみて、「このままでは村がなくなる！」という危機感とともに「与那に人が集まるようなイベントを」という思いでスタートした取り組み。はじめは集落をイルミネーションで彩り、そこからクリスマスライブ、地域のお年寄りをおもてなし…と年々発展し続けている。

私はゼミの活動として2016年から3年間、クリスマス会運営の手伝いや出し物として合唱を行ってきた。おじいおばあのクリスマス会としているが、集落内外から子どもやその家族も駆けつける。子どもがやってくると、おじいおばあはもちろん、隅でしずかに酒を飲ん

でいた男性たちの顔もほころぶ。子どもを連れてきた保護者は「どこから来たの?」「かわいい子だね」と子どもを通して地域住民とのつながりが生まれていく。実際に私も地域の子どもの子守をしていると、今まで挨拶程度だった男性から「あなたたちどこから来たの?」と話しかけられることがあった。

赤ちゃんは地域に暮らす年上のお兄ちゃんお姉ちゃんからおじいおばあまで、幅広い世代の住民に見守られ、可愛がられ、「地域の子ども」として伸び伸びと過ごす様子を確認することができた。

#### ・与那のこどもたちを東北へー東北大須研修ー

2019年2月、与那に暮らす中学生2名が宮城県石巻市雄勝町大須へ研修に行った。費用は全て与那区が負担する。

大須と与那の地域交流がきっかけとなり、実現した取り組みである。与那の公民館で、大須の海産物を使用したチャリティーイベント「海産物フェア」を行い、売り上げの一部を研修の活動資金とした。大須で冬の漁業体験や東日本大震災で被災した大川小学校跡地を見学するなど、現地に訪れたからこそできる学びがあふれた研修となっていた。

#### ・うないてづくり市

国頭村に暮らす、ものづくりが好きな女性たちが有志で2018年12月にスタートさせた活動。12月ということでテーマは「森のクリスマス会」。子連れの出展者も多く、近くにゆりかごを置いたり抱っこひもをつけたりしながら店番をしている方もいた。

大変そうに見えるかもしれないが、ものづくりを楽しむこと、ものづくり仲間と出会えることなど母親にとって大切な息抜きの時間になっているのだと感じた。歩けるようになった子どもたちは子ども同士で遊びまわったり、おやつを分け合ったり自由に過ごしていた。こどもの様子を観察していると、年齢の違う子ども同士のため、年上の子が年下の子の面倒をみながら過ごしている。

2019年3月3日には2回目の手づくり市「森のひなまつり」を開催予定。第1回よりも出展者はさらに増える見込みだ。

#### ・幼保連携型認定こども園くにながみこども園

奥間保育所と辺士名保育所・辺士名幼稚園が合併し、認定こども園として2019/1/7オープンした。見学を通して発見した、子どもにとってのよりよい環境を目指すくにながみこども園の特色を挙げていく。

##### ① 木の器

木育として、やんばるで採れたリュウキュウマツを地元の大工さんが加工。3歳児クラスから給食の時間に使用されている。食器の底にはやんばるの生き物のイラストが描かれており、「今日は何が出てくるかな?」と食事の楽しみが増える。

##### ② ランチルーム

調理室のすぐ横にランチルームを併設。5歳児は調理師の方から給食を受け取り、配膳を行う。給食の受け渡しが行われるカウンターを子どもに合わせた高さに設定されており、調理室とランチルームには高低差がある。晴れの日には窓の外のテラスで給食を食べる。

### ③ 木のおもちゃ

木育の取り組みのひとつ。やんばる森のおもちゃ美術館にある「木のたまごプール」をこども園内にも導入。木材を卵のように加工し、それを 300 個ほど直系 5 メートル程のプールに満たす。実はとても高価で贅沢な遊びを国頭村の子どもたちはさりげなくやることができるのである。

### ④ 避難所としての役割

造成により敷地地盤の高さを挙げ、津波被害を最小限にとどめる配慮。指定避難所としての役割も果たしており、園内にはシャワー室や障害者用トイレも併設。緊急時に備え、こども園そばに避難階段がある。

### ⑤ 年齢に応じた配慮

小学校入学時に備え、5 歳児クラスのみトイレは教室外にある。こども園の園庭は 2 つあり、年齢別に遊ぶことができる。高年齢の子が低年齢の子との事故を気にせず思いっきり遊べるぶことができるという配慮である。

### ⑥ 子育て支援センター「ゆっくいな」「くにながみ学童クラブ」を併設

管轄は別部署ではあるが、赤ちゃんから小学生まで同じ環境で過ごすことができる。また、保護者の送迎の負担軽減にもなるということで併設された。

[くにながみこども園の課題]

2019 年 1 月 10 日時点、保育士不足のため、待機児童が発生していた。敷地面積の定員は最大 190 名であるが 1/10 時点で 179 名。0 歳児待機児童 10 名と特に 0 歳児の待機児童が目立つ。

国頭村には 2 か所保育所があるが、もうひとつの保育所である楚洲保育所は 1-5 歳児対象のため、0 歳児の受け皿となるのはくにながみこども園のみとなる。保育士があと 2 名増えれば、0 歳児クラスをもう 1 クラスつくることができる。

育児休業をしている母親の職場復帰や、新たに働き口を探す保護者に影響が出ている。子育て支援センターゆっくいなに併設されている一時預かり所は予算がまだ通っておらず機能していない。

#### ・子育て支援センター「ゆっくいな」

子育て支援センターゆっくいなは、くにながみこども園に併設されている村の子育て支援センター。9-12 時、14-17 時開室。事前予約は必要なく、気軽に子どもと訪れることができる。保育士たちは子育ての相談相手として、また田舎暮らしの先輩として田舎のネガティブイメージであるご近所トラブルなどの相談相手にもなる。「ゆっくいな」の多様な取り組みをまとめてみた。

#### ① 子育てグッズの無料レンタル、リサイクル

ベビーカー、歩行器、ベビーベッド、おもちゃ、洋服などそろえるには費用が掛かってしまう子育て用品をリサイクルし、無料貸し出しを行っている。提供を呼びかけることはしておらず、処分するにはもったいないと感じた保護者達から自主的に提供されている。

#### ② ベビーマッサージ

名護市在住の定岡みどり先生が講師。ベビーマッサージは赤ちゃん「から」はじめられる、いつまでも子どもとふれあう時間として楽しめるものである。和やかに進むマッサージを通して母親同士が自然とお互いの育児の悩みを話し合う姿が確認できた。

マッサージ中、赤ちゃんの年上の兄弟たちは保育士がすぐ隣の遊び場で見守っていた。

### ③ ほめ愛講座

ベビーマッサージの講師である定岡みどり先生が行っている講座。年に一回。隣に座った方を褒める。母親の自己肯定感を育むトレーニング。

### ④ ベビーヨガ

産後の骨盤矯正に効くといわれており、赤ちゃんと触れ合いながら行える。ベビーマッサージ、ヨガなど講師の方々への謝金は運営補助金で賄われており、利用者の方々は予約や利用費なしで参加することが可能。

その他、15分母親のマッサージをしてくれるリフレクソロジーや、沖縄のわらべうた講座、村内にある森の美術館ツアー、季節行事などバラエティ豊かな活動を予約なし、無料で行っている。

利用者である母親たちに話を聞く機会をいただいた。

#### Aさん

息子（生後4ヶ月）と「ゆっくいな」をよく利用している。ベビーマッサージも慣れた様子だった。子どもは3人いて、年上の2人はこども園に通っている。上の子たちが赤ちゃんの頃からゆっくいなに通いつけている。国頭村役場を育休中で、次年度4月からこども園に預けることができたら職場復帰予定。育児休暇はもう少し伸ばす予定だったが、年度始めが園に入りやすいとのアドバイスを受け、早めに職場復帰することを決めた。

Aさんは鹿児島県出身、夫も豊見城市出身であり、周りに親戚がおらず心細い。そのため「ゆっくいな」で保育士や利用者とおしゃべりして楽しんでいる。

#### Bさん

アメリカのアラスカから地元国頭へ里帰り中。2ヶ月くらい国頭で過ごすので、その間「ゆっくいな」を利用。軍人さんの嫁なので転勤族。里帰りのたびに、気軽に「ゆっくいな」を訪れることができ、そこでママ友ができる。

#### Cさん

警察事務育休中で四月から復帰予定。こども一歳、上に小学二年生で学童クラブ入っている。旦那さんが国頭出身で去年まで那覇にいた。那覇では、予約を取る必要があるし、人が多いだろうという遠慮から子育て支援センターは利用していなかった。今は気楽に参加できるし、学童クラブに行き来しているため、利用への抵抗が少ない。

#### Dさん

山形出身。上京中に旦那と知り合い、求人量の多さを考え沖縄へ。沖縄市にいたが旦那の仕事の関係で最近引っ越してきた。こども2人とも次年度四月からこども園へ通えるよう申し込んだ。「はやく仕事がしたい」と言っていた。出産3人目するなら地元山形で。ふたりの子どもを親にみてほしいことが理由。

#### Eさん

大阪から夫、長女と3人で与那へ移住。現在長女5歳、次女3歳、三女1歳の5人家族。長女、次女はくにながみこども園に通っている。夫婦はやんばるの木を使った木工細工や染物などを仕事としている。次年度4月から三女もくにながみこども園に入園予定で応募済み。「やっの手仕事や家の掃除などゆっくいできる」と語っていた。

#### ・くにながみ学童クラブ

定員 40 名。延長保育は 19 時まで可能。延長代は補助金でまかなわれているため、保護者負担はない。けん玉に力を入れているようで、「けん玉ダンス」を 2019 年 1 月には村の産業まつりで披露した。

### 第 2 節 竹富町西表島東部（大富）の事例

#### 2-1 地域の特質

大富（おおとみ）は、集落の通称名として現在でも引き続き使用されており、実質的には単独の集落、自治会として存在している。かつて大字南風見仲の下に置かれた唯一の小字であった集落であるが、現在は行政的な地名としての「大富」は廃止され、字南風見仲として番地が設定されている。琉球王国時代には「仲間」と呼ばれていた場所であり、マリアの流行で 1900 年に廃村となった。

戦後、アメリカ占領下の 1952 年に琉球政府が入植者を募集したが、当時大きな台風の被害を受けた沖縄本島北部の国頭郡大宜味村や同じ八重山郡の武富島などの出身者多く応募し、集落を再興した。「大富」は「大宜味」と「竹富」の名前からとった地名である。

#### 2-2 地域の人口変化

|        | 世帯数 | 男   | 女   | 計   |
|--------|-----|-----|-----|-----|
| 平成 3 0 | 178 | 165 | 134 | 299 |
| 平成 2 5 | 149 | 153 | 133 | 286 |
| 平成 2 0 | 151 | 154 | 148 | 302 |

（竹富町字大富の人口動態 竹富町地区別人口動態票より）

#### 2-3 「地域と子育て」の現状

##### ・共同売店の役割

大富には現在でも「共同売店」が地域の重要な役割を果たしている。

沖縄の離島や北部、そして奄美にも残っている共同売店。地域住民全員が出資して株主となり、店のオーナーでもあり経営者でもあり利用者でもあるというシステムで、現在で現在の「生協」とほぼ同様な理念と役割を担っている。

共同売店は、現在も地域の交流拠点となることが多い。字大富にある大富共同売店もそのうちのひとつであり、パートタイマーとして働く主婦の方々が活気ある売り場づくり、誰もが過ごしやすい居場所づくりを行っている。

私たちが売店へ立ち寄ると、下校中の小学1年生たち3人が売店のトイレを借りていたが、少し立ち話をしていると小雨が降ってきた為、子どもたちは雨宿りをしながら売店内の休憩所で宿題をはじめた。時折、売店のパートさんが子どもたちの様子を確認している。

そのうちの一人の子の母親が迎えに来た。売店から「売店で宿題をしているよ」と電話があったらしい。売店のパートさんでありながら、母親同士。子どもたちから見ると「○○のお母さん」なので安心感があるのだろう。小さな売店が包括的な役割をしている所を確認することができた。

#### ・医療問題

西表島には診療所はあるが、病院はない。一番近いのは石垣島の病院である。私が調査をしていた際も高齢の方が救急ヘリで運ばれているところを目撃した。

子育てをする中でも第一に心配なのは、医療の問題だそう。もし家族、特に子どもの身に何かあったとき、一刻を争うときに島内に病院がないというのは不安がある。救急ヘリで石垣島の病院へ行くが、往復するだけでかなりの費用があるため躊躇することもある。

出産時の問題もある。出産においては石垣島のマンスリーマンションを借りて、万全の状態にしておくのが母子ともに安心。竹富町から出産に関する補助金（通院費、石垣島滞在費など）も出るが、全額補助ではないため金銭面が苦しい・仕事を休まないといけない等の苦勞もある。

#### ・移住者の多さとその現実

自然豊かな西表島にあこがれて移住を決意する人々が多い。一人で西表に移住し、西表で出会った人と家庭を持つ人。家族で移住する人。様々であるが、皆それぞれ西表に魅力を感じ、西表で暮らすことを選択して移住してくる。

移住者にとって3年、5年、10年、15年…と節目がある。イメージしていた生活とギャップがある、転勤がある、子どもが島外へ進学するため金銭面の負担を考えると、子育てのために西表で暮らしていたが子どもは巣立ってしまった（暮らす理由がない）、親の介護、家族の中に島の暮らしが合わない人がいる…など人の数だけ理由がある。そのため人口の変遷は少なくとも、人口を構成している「人」は入れ替わっている可能性が高い。

それでも様々な節目を乗り越えて、「島の人」になる移住者も多くいる。自分自身が西表好きか、子どものために西表に来たか、で節目の迎え方が違う。子育てを終えた方から聞いた話では、保育所で同級生は20名からスタートし、小学校で離任した先生の子どもが減り、中学校の卒業式になるとかなり同級生が減っている…という状況だったそう。節目の中でそれぞれの事情があり、島を離れる家族もいる。

#### ・やまねこ文庫

昭和 60 年頃、本屋がない島でも、子どもたちに本がある環境をという思いからお母さん仲間たちで始まった活動。家から本を持ち寄って、取り壊す予定であった昔の保健所の場所を文庫に活用した。県立図書館や絵本出版社などから本の寄付もあった。

行政が移動図書館を始める前に取り組みはじめていたという、小さくも画期的な活動である。やまねこ文庫のスペースを小さな集まりの場として利用することも可能。年に一度はチャリティーバザーを開催しており、地域住民が出店、売上げの一部を寄付して子どもたちに還元している。例えば人形劇団を呼び公演してもらったり、ワークショップを開催したりしている。現在、文庫利用はそのまま継続しながら、公文を開設しようと計画されている。

#### ・コミュニティの変化

離島といえば「隣近所はみんな知り合い」というイメージであったが、現在は地域行事などあまり参加せず、ひっそりと暮らす「だれかわからない」人も増えたそうだ。共同売店、保育所、PTA 会、婦人会、地域行事など様々なコミュニティがあるが、保育所に子どもを入れる以前の家族（母親と赤ちゃんなど）が孤立しやすいらしい。

西表島には公園など子どもが遊ぶ場がなく、保育園という居場所がなければ子育て仲間を見つけることに苦労する。その悩みに気づいた後、公民館などで「みんなでご飯を作ってゆんたくしよう」と先輩ママが声をかけることで少しずつ子育て仲間と交流できる、母と子が休まる、保育所以外のコミュニティが生まれているという。

公民館を利用した取り組みとして、「大富食堂」がある。公民館の台所を使って、「食を通して地域とつながる」活動で子育て世代の移住者が助成金を利用して主催。ムーチャーの時期にはムーチャーをつくって、売店に出した。味噌造りとゆし豆腐づくり（入植した当時は大富に豆腐屋が 2 軒あった）などはおばあが先生となって、昔から伝わるレシピをもとにすすめられた。

子どもからお年寄りまで料理を通して楽しくつながることのできる活動である。

しんめ一鍋でじゅーしーづくりも行った。有事の際にガスがなくても、薪で食べ物を作れるよう、地域の消防団の方々も参加した包括的な内容にも発展している。

#### ・宅地分譲で生活支援

公民館が公有地を新しい住民のために分譲した。定住を目的とし、安い価格で土地を分譲しているため、20 年は土地を売れないように設定している。現在の大富の公有地の歴史は開拓時代に遡る。開拓移民たちで切り拓いたみんなの土地を「共有地」と呼んだ。今その共有地を動かそうと思うと、現在島の外に暮らしている過去の開拓移民すべての判が必

要になるため手間がかかる。共有地を公民館の土地＝公有地とするべく、全国各地の元開拓移民を訪ね印を得たという苦勞がある。

・地域の大人は準 PTA 会員

子どもがいなくても、子どもが学校に通っていないなくても、準 PTA 会員として地域住民は PTA 会費を納めている。（小学校 500 円、中学校 1000 円）大原小学校は家族対抗のグラウンドゴルフ大会を行う。中学校はそのお礼として集落対抗球技大会。子どもが大会の運営、保護者が豚汁を振る舞う。

子どもが卒業しても、自分自身に子どもがいなくても、地域の子どもと関わりつづける環境がある。どの子が誰の子どもか、地域住民が赤ちゃんの頃から見守り続ける。このような行事のほかにも入学式や卒業式に地域住民が参加することもごく自然なことのようだ。

西表島には高校がなく、高校進学とともに島を離れる「15の春」が存在する。15の春や成人式では、該当する子どもがいる家庭は自宅を開放し、オードブルを用意しておく。すると地域住民が 2000 円くらいを包み、その家庭を訪ねてまわり、門出を迎える子どもと家族に祝いの言葉を伝える。にぎやかで温かい、地域と家庭の関わりを見ることができた。

・大富の事例を通して

「島は人間関係が大変」というイメージがあるが、西表は島民が「西表共和国」と自称するほど昔から移住者が多く、よそから来た人に対し比較的寛容である。そして移住者の方々は「西表が好き」だから医療や金銭面に不安があっても西表島で暮らすことを選択する。

また、「人生を楽しく好きなことをしたい、環境（西表）をさらによくしたい」という意欲があるため、他の離島・へき地と比べて、新たなアイデアやコミュニティが生まれやすいと感じた。もともと好きなこと・やりたいことをベースにした何らかの活動をライフワークとしている方も多く見かけ、その発展で地域の諸問題を軽減していこうとする力強さを感じた。

### 第3節 奄美大島大和村名音地区の事例

#### 3-1 地域の特質

『九州と沖縄の間にある奄美大島。その中央部の西海岸に、大和村はあります。コバルトブルーの東シナ海と、奄美最高峰である湯湾岳(標高 694m)に挟まれた 11 の集落が南北に点在しています。

平地は少なく、総面積 88.26km<sup>2</sup>のうち、約 89% が山林原野で占められています。気候は、亜熱帯海洋性で年間平均気温が 21.5° C、月平均降水量は 240mm 程で、四季を通して温暖多雨です。集落の周りには、防風林に囲まれた畑が広がっています。自家消費用の野菜を作っている方が多いですが、物産館や無人販売所、名瀬の市場に卸す人もいます。奄美すももやたんかんが基幹農産物で、果樹の村として名を馳せています。

人口は約 1500 人で、世帯数 860 戸程です。集落によって雰囲気異なり、それぞれに愛着と誇りを感じられます。小学校は、大和小学校(現在休校:湯湾釜分校)、大棚小学校、名音小学校、今里小学校の 5 つ。中学校は、大和中学校の 1 つです。高校はないので、奄美市など村外にバスで通うことになります。医療機関として、大和診療所、今里へき地診療所があります。AED は各集落に設置してあり、ドクターヘリの離着陸場が村内に 9 ヶ所あります。また特別養護老人ホーム「大和の園」や、大和村高齢者集合住宅「まほろば憩いの里」、デイサービスを行なっている「大和村老人福祉センター」など高齢者福祉にも力を入れています。』(「大和村 移住・定住ガイドブック」平成 30 年 4 月 23 日改訂より)

### 3-2 地域の人口変化

| 大和村名音 | 総数  | 男   | 女   | 世帯数 |
|-------|-----|-----|-----|-----|
| 2013  | 203 | 108 | 95  | 108 |
| 2014  | 208 | 107 | 101 | 110 |
| 2015  | 213 | 110 | 103 | 113 |
| 2016  | 207 | 108 | 99  | 115 |
| 2017  | 202 | 105 | 97  | 114 |
| 2018  | 196 | 100 | 96  | 113 |

(住民記録人口世帯集計表より)

### 3-3 「地域と子育て」の現状

- ・のんティダの会の誕生

「のん」は「名音」が訛ったもの。2011年、村が策定した地域福祉計画の一環として、地元住民が主体となって、集落で支援を必要とする住民を把握するための集落マップづくりを行ったことがきっかけとなった。

名音集落は高齢化率が高く、高齢者の孤立防止に「気軽に集まることのできる場所ができたら」という思いから、2012年の冬、集落の数名が中心となり取り組みをスタートしたそう。補助金がもらえるのは最初の1年だけ。その後は集落のメンバーで協力しながら活動を続けてきた。

活動によって得られたわずかな資金を積み立てクーラーを設置するなど、「自分たちのことは自分たちで」という精神が根底にある。

2017年9月現在、ティダの会メンバーの平均年齢は80歳。男性3名、女性14名の計17名で構成されている。会のモットーは「できる人が、できるときに、できることをする」。

それぞれができる範囲で、自分の役割をもって楽しく活動ができる。持続力のある組織をつくっていくための重要なポイントだと感じた。

#### ・のんティダの会 笑談所

名音集落には、のんティダの会が運営しているサロン「のんティダの会 笑談所（しょうだんじょ）」という物置小屋を改装した建物がある。地域の憩いの場、住民同士の情報交換の場として大切にされている。

この場所でお酒を飲みながら、住民がもっているアイデアや取り組みたいことを話し合い、様々な取り組みが実行されているという。月に1度、土曜日に笑談所で授業を行う。グランドゴルフや地域の方々を招いての総合学習が多いそうだ。

この場所を中心として、こどもからお年寄りまで、年齢を超えた地域のつながりが生まれている。こどもたちは笑談所で行われる島唄・三味線教室へ参加したり、おやつを食べに来たりする。また、老人たちが知っている名音集落の昔話をもとに小学生が紙芝居をつくり、披露した。名音小学校で行われる運動会は年齢を問わずたくさんの地域住民が参加し、まるで地域の運動会のようなものである。

#### ・名音集落に子どもの数が多い要因

名音小学校は児童数約20人であり、就学前のこどもは20人以上（2017年9月時点）となっている。

名音集落は高齢化率が高い地域であるが、少子化の進行は比較的遅い。近年こどもの数、特に就学前のこどもが増えているという。「子育ては島で行いたい」という思いからUターン、Iターンしてくる若い世代が増えているからだ。

地域がこどもを育ててくれるという安心感、心強さが島にあるのだろう。また、Uターンする若者は高校まで島で過ごした者が多い。その理由として、「地域の行事運営や地域住民

との交流などの思い出が15歳で島立ちをした子に比べてたくさんあるから、島から出るとそれが懐かしくなる。自分がこども時代を過ごしたこの島にもどってこどもを育てたいと帰ってくるのだと思います。」と重野さんは言っていた。

保育所には父親が外国人という子ども2人いる。英語しかはなせず、保育士や私たちが話す日本語は十分には伝わっていないようである。しかし子どもたちは楽しそうであった。保育士も地域の人々も、他のこどもとわかる様子もなく、島の子のひとりとして地域が受け入れる雰囲気があった。

名音地区で地域による子育てができている要因を3つにまとめてみた。

① 「地域のこども」という意識が強い

地域にいるこどもは、地域みんなで育てるという考え方がごく当たり前のようにある。

⑤ 年齢を超えた地域のつながりがある

「のんティダの会」をコミュニティの中心として、老人会、壮年団、婦人会、青年団、こども会の幅広い世代が交流する機会がある。

⑥ 人の活動をうまく子育てに結び付けている

ティダの会 笑談所での島唄・三味線教室や名音に伝わる民話を紙芝居にする取り組みが老人と子どもとの交流や地域のこどもたちの学びの場となっている。

#### 第4節 「地域が子どもを育てる」とは何か

地域で地域の子どもの成長を見守る。その言葉が具体化されたような取り組みの数々のほんの一部を今回の調査で教えていただいた。

子どもは地域行事や子ども会活動を通して、地域に住む人々と繋がりが生まれる。自身の家庭環境や文化資本だけではなく、その外にある島の文化や出会う人々の文化を学ぶことができる。それは都市部でも子ども会や自治会活動で行われているであろうが、たくさん情報に埋もれ、そのような活動に関われることは確率的に低いだろう。そして「関わろう、関わりたい」と思うきっかけが比較的少ないと感じる。

小さな島や集落だから人の数も少なく、それぞれが巡り合いやすい。都市部に比べ、職業とされる仕事以外にも趣味や生活の一部としてもものづくりや狩猟採取、地域の歌や踊りを大切にしている大人たちが身近にいる環境というのも「多様な生き方がある」と感じるきっかけになり、魅力ある生活環境である。そしてそれを最も感じているのがいわゆるIターン、移住してきた人たちであろう。

保護者は、子どもを通して地域とつながり、地域に子どもも保護者も育ててもらおう。少しずつ少しずつ周囲に知り合いが増えて、地域行事などの共同活動を通して「知り合い」から「年齢の違うお友達・島のお父さん、お母さん」「子育て仲間」のような関係の人になっていく。地域に愛着が湧き、その地域に馴染んでいくのではないだろうか。

子どもの居場所が親の居場所にもなっていくという表現ができるのではないか。『親が沖縄に居場所を見つけられるか。住んでいる場所を好きかどうか。』（「座談会 沖縄で育つと子供は幸せ？」沖縄スタイル 2005年5月10日発行 p53より）が重要であることを考えるのならば、子どもの存在は極めて大きいといえよう。

私自身、調査を進めていながら「親がこの地域に居場所を見つけられるかどうか」が子育てをしている保護者の安心感を左右するのではないかと感じていた。そして保護者が安心して子育てをすることで子どもも落ち着いて日々を過ごすことができる。

また、保護者は「地域で暮らす若手」として地域行事やそれぞれの仕事を通して地域をつくっていく担い手である。子どもを含めた家族を見守ってくれている地域へ、子どもが成長していく場である地域へ、何かできることはないだろうかと保護者達はそれぞれ考え行動していく。それによって地域としての活動が活発になっていく…というように「子ども」「保護者」「地域」がそれぞれにつながり、支えあっているシステムが構築されていく。まさに両親にとってだけでなく地域にとっても「子は鎧」なのである。

## 第2章 共同売店運営に関わる女性たちによる地域活性化

### 第1節 国頭村字奥の事例

#### 1-1 地域の特質

国頭村字奥は、那覇からおおよそ130km、沖縄本島最北端の太平洋に面する所に位置する。集落は太平洋に注ぐ奥川河口左岸に位地し、海上はるか北方に鹿児島県世論等を見ることができる。南には、標高420mの西銘岳がそびえたち、東には尾西岳がひときわ高く周囲を圧している。

交通の面では、1942年(昭和17年)に海岸沿いの県道が完成したが、一度の車の乗り入れも実現しないまま暴風被害で崩壊してしまった。戦時の色が濃くなってきた時勢であったため、修復に手をつけることはなかった。しかし、1953年(昭和28年)に旧山道に沿った自動車道が開通して車が自由に往来できるようになり、また1963年(昭和38年)には路線バスも運行するようになった。さらに日本復帰に伴い漸次道路整備が進められ、1981年(昭和56年)には国道58号線が作られ、現在に至る。

田村浩の『琉球共産村落の研究』には、琉球各地の村落の発達は、古代期と中古期および近世期3つの時期に区分し得ると書かれている。田村は、「奥は中古期(1187～1611年)に発生した村落の一つであるといい、この期の村落は一般に古代期から転じた門中氏族が最も古い一門を構成し、その門族から漸次支別して村落の発生を見るといわれており、奥は南風原、佐手、辺野喜等と共にこの期の村落の一例としてあげておられる。」(100頁)

奥は住民のほとんどが農林業に従事している。昔は林業が盛んだったそうだが、近年は農業が主な産業になりつつある。1960年(昭和35年)ごろから1975年(昭和50年)ごろまではパインの栽培が盛んであったが、1975年(昭和50年)以降は次第に果樹に変わり、パインは

消滅した。

現在山地では茶と果樹が栽培されている。1929年(昭和4年)からは本格的な茶の栽培がはじめられ、部落には茶工場もあった。茶の種類は台湾茶と静岡茶の2種類で、四月中旬ごろに新芽を摘みとって茶工場に出す。パインやキビ農業が盛んになるにつれて、林業は衰えているが、それでも奥の中での経済には欠かせない収入源となっている。

奥と言えば、「奥共同店」が本土においても、専門の学者には広く知られている。1927年(昭和2年)に刊行された田村浩著「琉球共産村落の研究」によって「奥共同店」が広く知られるようになった。

奥共同店は、明治39年に創立された。それまでは、国頭村字奥には雑貨商を営む者が2人いた。与那原から事業に失敗してほとんど着の身着のまま奥にやってきた太田氏と、奥で古くから雑貨商を営んでいた糸満盛邦氏である。

「太田氏は、豆腐の販売を皮切りに酒や素麺を取り扱うようになり、やがて与那原の従兄弟の船を利用して雑貨賞を営むまでになる。私有財産制が浸透していく沖縄社会の中で、みごとにその時代の波に乗ることができた典型的な成功例であろう。(宮城:2015:8)」。奥の住民は、農業や林業に関わることなく財を築いていく太田氏をあまり快く思っていなかったようだ。

一方、糸満盛邦氏は、三男の盛弘氏とともに奥の人々の利益になる商売の方法を考えていた。「そして、ついに自らの雑貨商店の資本を奥集落に譲渡し、共同店の設立資本金としたいことを集落に提案した。

奥の人々はそれに賛成し、資本金として320円余りを集め、さらに沖縄銀行名護支店から600円を借り入れて1960年(昭和35年)に奥共同店を開店するに至った。(宮城2015:9)」

「発足以来順風に乗った共同店は、創立後3年にして、銀行からの600円の借入金を返済し、融通資本1500円、宅地、建物300円、山原船三隻1200円、純資本合計数千円の店に発展したのである。(奥のあゆみ:1988:86)

「このような経緯で共同店は設立されたのであるが、その運営はかならずしも順風満帆だけではなかった。時には部落民のなかから、共同店を破壊して、自分の営利の機会を狙うものもあったが、融資の良識と固い結束と努力によって、着々と繁栄を築いたのである。大正の中期から昭和の初期にかけて共同店は全盛をきわめ、新たに預金部を設けて各戸の税金も共同店の預金を通じて支払うようになった。そのため納税成績は県下でトップを占め、各個人の手から直接納税することはなかった。だから奥は「無税村」と異名を取るほどであったといわれ、共同店の繁栄は同時にまた部落の繁栄でもあったことを示している。当時、村医さえ置けない町村が多かったが、奥は一ヶ部落で診療所を持つほどの力があつた。このことは他に類を見ないことである。その他、字費をはじめ学校後援会費、青年会図書費等ほとんど共同店でまかない、設立以来奥共同店は常に部落の中核となって部落発展の推進力としてその役割を果たしてきたのである。(奥のあゆみ:1988:86)」

## 1-2 奥地域の人口推移

| 年 | 国頭村 |      |
|---|-----|------|
|   | 総人口 | 総世帯数 |
|   |     |      |

|      |        |       |
|------|--------|-------|
| 1920 | 11,525 | 2,262 |
| 1925 | 10,112 | 2,171 |
| 1930 | 10,417 | 2,154 |
| 1935 | 10,460 | 2,231 |
| 1940 | 9,969  | 2,105 |
| 1950 | 12,000 | 2,615 |
| 1955 | 11,267 | 2,329 |
| 1960 | 10,653 | 2,292 |
| 1965 | 9,192  | 2,094 |
| 1970 | 7,324  | 1,874 |
| 1975 | 6,568  | 1,845 |
| 1980 | 6,873  | 2,455 |
| 1985 | 6,510  | 2,307 |
| 1990 | 6,114  | 2,065 |
| 1995 | 6,015  | 2,090 |
| 2000 | 5,825  | 2,104 |
| 2005 | 5,540  | 2,145 |
| 2010 | 5,546  | 2,114 |
| 2015 | 4,908  | 2,061 |

字別人口推移

| 年    | 字浜  |     | 字半地 |     | 字比地 |     | 字境地 |     |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|      | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 |
| 2005 | 387 | 143 | 190 | 70  | 144 | 49  | 480 | 218 |
| 2010 | 396 | 142 | 166 | 64  | 125 | 49  | 456 | 215 |
| 2015 | 370 | 134 | 168 | 60  | 122 | 53  | 427 | 190 |

| 年    | 字奥間 |     | 字桃原 |     | 字辺土名  |     | 字宇良 |     |
|------|-----|-----|-----|-----|-------|-----|-----|-----|
|      | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口    | 世帯数 | 人口  | 世帯数 |
| 2005 | 429 | 175 | 275 | 104 | 1,524 | 585 | 130 | 55  |
| 2010 | 455 | 170 | 292 | 106 | 1,629 | 595 | 149 | 57  |
| 2015 | 441 | 159 | 323 | 112 | 1,652 | 563 | 148 | 59  |

| 年 | 字伊地 | 字与那 | 字謝敷 | 字佐手 |
|---|-----|-----|-----|-----|
|   |     |     |     |     |

|      | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口 | 世帯数 | 人口  | 世帯数 |
|------|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|-----|
| 2005 | 213 | 70  | 258 | 98  | 45 | 23  | 101 | 45  |
| 2010 | 195 | 67  | 226 | 90  | 43 | 20  | 75  | 38  |
| 2015 | 196 | 74  | 193 | 85  | 34 | 17  | 86  | 43  |

| 年    | 字 辺 野<br>喜 |     | 字 宇 嘉 |     | 字 宜 名 真 |     | 字 辺 戸 |          |
|------|------------|-----|-------|-----|---------|-----|-------|----------|
|      | 人口         | 世帯数 | 人口    | 世帯数 | 人口      | 世帯数 | 人口    | 世 帯<br>数 |
| 2005 | 174        | 86  | 62    | 24  | 177     | 85  | 108   | 48       |
| 2010 | 136        | 79  | 55    | 23  | 126     | 65  | 85    | 48       |
| 2015 | 158        | 81  | 42    | 21  | 112     | 60  | 71    | 42       |

| 年    | 字 奥 |     | 字 楚 洲 |     | 字 安 田 |     | 字 安 波 |     |
|------|-----|-----|-------|-----|-------|-----|-------|-----|
|      | 人口  | 世帯数 | 人口    | 世帯数 | 人口    | 世帯数 | 人口    | 世帯数 |
| 2005 | 206 | 90  | 68    | 30  | 185   | 91  | 184   | 82  |
| 2010 | 175 | 84  | 78    | 35  | 182   | 87  | 168   | 80  |
| 2015 | 190 | 94  | 87    | 37  | 150   | 75  | 144   | 76  |

### 1-3 奥共同売店をめぐる女性たちの思い

現在、奥共同売店は赤字経営を続けている。

そのために、民間に委託した方がいいのではないかという意見が出る中で、集落内に住んでいるおじやおばあのために共同売店を集落で続けていくためのアイデアを出し合う会が行われている場に参加し、話を聞かせてもらった。

多くの共同売店が潰れてしまう赤字の原因は様々である。周辺地域にコンビニエンスストアができてしまって利用する人が減ってしまったことや、集落内での利用者が減ってしまったこと、利用するお客さんのツケがたまってしまい、その回収ができず店が負担してしまうことなどである。

現在奥集落では、共同売店の運営にあたって、一部の住民の信頼がなくなりかけているという現状がある。集落の共同精神で成り立つはずの共同売店が、2つの意見に二つに分かれているのだ。

「100年以上の歴史を持つ奥共同売店」ということが、逆に新しいことに取り組んでいくという発想を持つことがとても難しくなっていると話す区民も少なくない。

「伝統」は昔からのものを変わず受け継いでいくという考え方が一般的であるが、実は、その時代に合わせたものに変化していったからこそ存続できたという面も見落としてはならない。共同売店は、「変えるべきではない」と「変えていくべきだ」の二面性を持っている

る。現在は、共同売店の何回目かの過渡期だと言えよう。

そんな中、奥集落では、民宿やお店を経営している方や、ものづくりの先生をしている方などが住んでおり、とても人材に恵まれている集落である。

赤字経営が続く中、委託にすべきだという「大きな声」がある中、実は、集落の人々が一丸となって奥共同店を維持発展させていくべきだと考えている人の方が多いことが今回の調査で理解できた。そういう人たちはむしろ改革派である。区民の知恵と力で現在の危機を乗り切るために共同売店を「変えていこう」というのである。

共同売店が建て直した後にどのような取り組みをしていけばいいのか、「共同売店がどういう場であってほしいのかという夢を語ろう」という会が8月に実施された。

これまでの共同売店の主な運営は男性であったことから、年齢の上下関係が希薄な女性たちの自由な発想と意見を聞こうという「ユンタク会」である。以下はその「ユンタク会」で発言された意見をまとめたものである。

- ・しっかりお店を管理する人材を育てられるようなシステムを作る。
- ・安く仕入れられるコンタクトを持っている人は集落内にいるから、その人脈を活用して安く仕入れ、共同売店の売値を今よりも安く買えるようにしたい。
- ・ちょっとしたものを買いに来た人がお金は取らないでおしゃべりできるようなサロンを中心に作りたい。本を読める場所とか。
- ・集落の特産品を使ったお惣菜などを売店で作る。
- ・仕入れるものを缶詰とか日持ちするものにする。しかも今は全国の珍しい缶詰がいろいろある。奥に来て珍しい缶詰があったら、観光客の方も面白がって買ってくれるのではないかな。
- ・共同売店前の草取りをボランティアでやっているが、一人では間に合わない。みんなが気づいたらやるということをしたら負担なくできるのではないかな。花園がきれいだと雰囲気も良くなる。
- ・危険物取扱免許を持ちたいと思う人を応援するような空気を作る(ガソリンスタンドも兼用で置いているため、販売には免許が必要)受験料は売店が負担してくれるとか。
- ・毎日理事の人など直接的にお店に関わっていない人が交代で帳簿をチェックする。不正防止にもなるし、不正を疑われることへの防止にもなり、店員が気持ちよく働ける。

実践するにはいろいろなものを乗り越えて行かなければならないが、集落内に共同売店のことを思ってアイデアを出してくれる人々がたくさんいることは、とても重要である。自分の住んでいる地域のお店をよりよくしようという気持ちがよそ者である私にも伝わってきた。それぞれ自分の仕事を持っている女性たちばかりであったが、その経験を生かしたアイデアも聞くことができた。

このユンタク会以外でも、この集落内の比較的若い世代(20~30代)の意見も聞くことができた。

若い世代は、自分で車を運転して国頭村内のスーパーや名護市内の大型ショッピングモールに買い物をしに行き、共同売店よりも安く商品を手に入れることができる。共同売店がなくても生活していけるというのが現状なのである。

しかし、お酒や子どものおやつ、そして買い忘れた調味料を買いに共同売店を利用するという。「このお店がなくなったら、集落内に住んでいるおじやおばあはどうやって買

い物をするの？集落内で困る人がいるくらいだったら、市内のスーパーで買うものと共同売店で買うものを決めて、少しでも共同売店のために集落のためにお金が回ればいいと思う。それはみんなで協力しないといけないと思う。」と話していた。

まさに、これが奥集落内での共同の経済活動を行うために住民が協力する姿勢だと感じた。そうやって奥の住民たちは戦後を生き抜いてきたのだ。

現在、共同売店の存続危機に、将来について夢を語る会を開催したり、ムラのために自分にできることをやろうという気持ちを持っている方が多く存在すること自体が今後の奥集落では希望ではないか。そして、その中でも特に女性たちが自由で夢がある様々なアイデアをもっているということが最も重要な可能性である。

女性たちがいかに主体性をもって共同売店の運営にかかわることができるのか。そのシステムや気運をつくるのが今後の奥共同店の将来を決めるのだといっても過言ではないと思う。

## 第2節 与那国島比川地域の事例

### 2-1 比川地域の特質

与那国島は日本列島の最西端に位置する。緯度では、台湾台北市より南で、台湾の東海岸までの距離はわずか110km。天候次第では台湾が見える。(与那国島誌 P21)

第二次世界大戦までの産物は、農業から米、黒糖、漁業から鰹節、鮮魚等を出荷していた。旗魚、鰹の漁獲は今日も盛んである。副業は養豚が主であった。取引市場は石垣と那覇であったが、1920年代より台湾基隆及び蘇澳との取引が盛んになり、台湾銀行券が通用した時代もあった。那覇方面への移出物は米、黒糖、鰹節等であり、台湾方面へは豚、鰹節、鮮魚等であった。「海路は古来幾多の悲劇を演じてきた。それは与那国民謡の大半が海上平安をうたっているのでもわかる。往来は飛舟、御物船が唯一の航海機関であったが、近代になって、小型発動機船や大阪商船の1000トン級汽船が就航するようになった。しかし港の不備、気象の不知、商船の不定期寄島などのために、所詮孤島苦の解消、悲劇の終幕までにはまだまだ遠かった。

陸路は丘陵が多いため陰阻な所が多かった。往時より馬が唯一の交通機関であった。1945年に、各部落を一環した道路が出来上がり、自動車を通ずるようになって、非常に便利なものになった。この道をヘイズ道路と称している。」(『与那国の歴史』P4～P5)

現在、与那国島は自衛隊基地を誘致し、比川に自衛隊の宿舎をつくり、自衛隊員とその家族が生活している。そして、5年ほど前まではIターン者がとても多い島だったが、自衛隊誘致後は島を出ていった人も少なくないという。

### 2-2 与那国島の人口の推移

| 年 | 与那国島 |      |
|---|------|------|
|   | 総人口  | 総世帯数 |
|   |      |      |

|      |       |     |
|------|-------|-----|
| 2009 | 1,622 | 798 |
| 2010 | 1,605 | 797 |
| 2011 | 1,619 | 801 |
| 2012 | 1,574 | 772 |
| 2013 | 1,558 | 796 |
| 2014 | 1,514 | 789 |
| 2015 | 1,485 | 779 |
| 2016 | 1,690 | 917 |
| 2017 | 1,706 | 920 |
| 2018 | 1,715 | 948 |

地域別人口推移

| 年    | 祖納    |     | 久部良 |     | 比川  |     |
|------|-------|-----|-----|-----|-----|-----|
|      | 人口    | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 |
| 2009 | 1,011 | 504 | 482 | 239 | 129 | 55  |
| 2010 | 993   | 494 | 486 | 248 | 126 | 55  |
| 2011 | 999   | 497 | 492 | 249 | 128 | 55  |
| 2012 | 959   | 472 | 498 | 246 | 117 | 54  |
| 2013 | 953   | 484 | 479 | 255 | 126 | 59  |
| 2014 | 923   | 480 | 472 | 249 | 120 | 60  |
| 2015 | 926   | 473 | 446 | 252 | 113 | 54  |
| 2016 | 1,004 | 496 | 572 | 361 | 114 | 60  |
| 2017 | 1,017 | 497 | 574 | 362 | 115 | 61  |
| 2018 | 972   | 490 | 588 | 381 | 155 | 77  |

2-1 与那国島比川共同売店をめぐる女性たちの活躍

比川共同店は建物が町立民営であり、経営は民営という他の共同売店とは異なる店である。今回の調査は、その比川共同店の運営を始めたときのメンバーの一人である女性にお話を聞かせていただいた。

彼女は出身は東京であり、与那国島に移住をして暮らしている I ターン者の一人である。学生時代には美術を専攻しており、沖縄のものづくりが丁寧であることに憧れを持っていたそうだ。そして、自分の生涯を暮らす場所を探して日本の南の沖縄、最西端の与那国島からスタートしたが、そのまま与那国島で暮らしはじめ、今に至る。

比川という地域は、もともと共同売店はなく、個人経営の商店のみの地域だった。しかし、その個人経営の商店も 15 年ほど前になくなっていく。集落にお店がなく、そのため、あまり遠くへ買い物に行くことができないおじい、おばあが買い物ができる場所がなくなり困っているという現状だった。

[共同売店の様子]

インスタント食品もとても充実しているが、日持ちする缶詰やお菓子、地域の特産品なども売っている。学用品や生活必需品のほかにも、USB メモリがあったり、携帯用の裁縫セットがあったり、どこか 100 円ショップのような雰囲気も持ち合わせている。

入口に入ってすぐのところには、比川共同店のとてもかわいいオリジナルグッズがおかれている。デザインが得意な従業員の方がデザインをして商品化したそうだ。

日持ちする缶詰や調味料は、私たちが普段利用するスーパーなどに置いていないような個性的なものがあるので、比川地域以外からもお客さんが頻繁にやって来るし、観光客にも人気があるそうだ。

買い物以外にも、『ひない文庫』という本を貸し出すスペースがあり、沖縄県立図書館の分間の役割を担っている。また、お店の奥にある畳の間に休憩ができる場所や、無料 Wi - fi、無料パソコンがあったり、気軽にお店に来たくなる工夫がいろいろなところにあった。

その比川共同店は、経営に関しては素人であった主婦が集まって運営をはじめ、それは現在も継続している。設立当初は石垣島の星野共同売店の経営方法を一から学び、他方でインターネットを駆使して安い仕入先を探し、年間 4,000 万円ほどの売り上げを計上した。

最初のころは従業員のほとんどが I ターン者であり、地域からあまりよく思われなかったこともあったそうだ。しかし、今では、郵便の受付をお願いされたり、住民からほしいものの依頼を受け、その品物を仕入するなど、比川の住民になくってはならない存在になっている。

比川共同店がほかの共同売店と異なるところがもう一つある。

それは、お酒を売っていないということだ。沖縄や奄美の多くの共同売店では、お酒やたばこの売り上げが上位を占めている。しかし、比川共同店は共同売店の大きな売り上げになるお酒を置いていない。理由は、主婦で運営しているため、住民の健康を考えるとともに、クリーンなイメージを持ちたいという思いがあるからだ。

始めた当初は I ターン者が多かったが、現在は 30~65 歳の女性(島人：9 人 I ターン：3 人)12 名の従業員でお店を運営している。シフトは以下のとおりである。

①7:00~13:00

②13:00~18:00

③18:00~20:00(18:00~22:30 の時間帯は主婦では長時間の勤務が厳しいため、時短。)

#### ④20:00～22:30

通常の共同売店は、19時～20時までの営業であるが、比川共同店は22時半まで空いていることが大きな特徴である。

それを実現させるための様々な工夫もされている。例えば、夕飯時の時間帯や子どもが寝る時間帯は2時間という短い時間の勤務でシフトを回している。そういうところに、女性ならではの働き方の知恵がある。

とてもアイデアが豊富な従業員ばかりで、なぜそんなにアイデアが思い浮かぶのか聞いてみた。「日常生活の問題。家庭でも、奥さんが買い物に来て旦那さんは来ないということも多い。自分たちも利用しているお店であるからこそ、おのずとお客さんのニーズがわかってくる。そこでアイデアが生まれる。比川周辺にはここにしかお店がないから、立地条件がいいということもある。」ということである。

比川から島の中心地である祖納に行くには、車だと10分くらいだが、歩きとなると峠道をこえて1時間くらいかかってしまう。高齢者が歩いていくのは難しいし、買物後に荷物をもって歩いて帰ってくるのは不可能と言わざるを得ない。小さな子どもを抱えた母親も同様である。だからこそ、比川の共同売店は地域の人、特に高齢者や小さな子どもがいる母親にはとても大きな存在なのである。現在では、比川共同売店は住民の日常生活にはなくてはならないものになっている。

一方、共同売店の方も、住民が求めているものや、何を置いたら売れるのかというアイデアを楽しみながら考えて経営を行っている。

誰でも、楽しいものであればどんどんアイデアが思い浮かんでくる。それを実践しているのが比川共同売店で働いている女性たちなのである。

「なぜ、地域のためにこんなにがんばれるのか」と実質的なリーダーである山口さんに聞いてみた。

「自然がたくさんで、おだやかなこの島で子育てはとてもしやすい。そして、自分の住みたい地域に住むことができるというのはとても幸せなことだと思う。だからこそ、よりよく暮らしたい！この地域をよりよくしたい！共同売店をよりよくしたい！という気持ちになる。」とおっしゃった。

女性はいい意味で仕事と家庭が切り離せない。この売店では、客観的にお店を利用する自分もいれば、経営者として関わる自分もいる。生活と仕事が混ざっている部分をうまく生かして経営しているということだ。

沖縄など他の地域の共同売店の場合は、歴史や伝統があるために、逆にそれにとらわれ、自由な経営ができないこともある。それに対して、地域に商店がなく、共同店の歴史もなかった比川地域では、比較的新しいことを始めやすかったという。

しかしその一方で、与那国島には高校がないため、子どもが大きくなり、高校進学になると、島に住んでいた人々が家族で那覇に引っ越すということも少なくないようだ。そのため、共同店で働いていた人がやめるケースも少なくない。

### 第3節 奄美大島大和村大棚の事例

### 3-1 大和村と大棚地域の特質

奄美大島はほぼ全島が山地に占められ、人間が居住する集落の多くは小河川による開析や離水によって形成された狭小な海岸平野に立地する。それぞれのシマは周囲を山地に囲まれているため、近隣のシマとの通行が困難であった。また、シマは海岸平野とそれに接続する山地斜面を農地とし、正面に広がるサンゴ礁と海とをこれらに組み合わせて自給的な生業基であり、自己完結的で秩序だった空間構造を有していた。

大和村大棚は大棚川によって形成された小規模な海岸平野に立地する、大和村最大の人口規模を有する。「大棚川を境界として東側は池田またはアガンマ、西側を里と呼ぶ。池田の東側には、山を隔てて毛陣と呼ばれる海岸平野が広がる。毛陣は大棚と同規模の海岸平野で、かつては住居があったが、津波により大棚に移転したとの伝承がある。」（『奄美もっと知りたい』P24）

現在、毛陣の平野部には荒地が広がるが、一部は農地として利用される。また大棚の西側には大金久がある。大金久は狭小な海岸砂丘上に立地するシマである。大棚には金久が存在せず、里と池田で構成されている。戸数では池田 53、里が 114 で、里の規模が大きい。

小中学校（調査当時）・診療所・公民館・カトリック教会・共同売店などの公共施設は、すべて空間的に余裕のある里に立地する。大棚の場合、池田は里とは別に形成されたと推定される。里は西側に向かって拡大した。

奄美大島のシマは自然障壁によって孤立し、自己完結的な小宇宙を形成してきた。シマは自給的な生業基盤を有していたが、明治以降の近代化とカツオ漁業や大島紬の発展にとともに、貨幣経済のなかに組み込まれていった。共同商店は、孤立的なシマに立地する小規模な小売店である。名瀬との交通路が整備されていない時代にあつては、共同商店は食糧・飲料のみならず、日用品などの消費物資をシマに供給する役割を果たした。

1953 年の日本復帰以降、島内の交通インフラストラクチュアは整備され、シマの零細な共同商店はその歴史的な役割を終えたようにも見える。（『奄美もっと知りたい』P30）

しかし現在もなお、奄美大島には共同商店が存在し営業を続けている。

沖縄県の事例では、共同商店が存続する地域の特徴として「地理的隔絶性」が指摘されている（宮城 2003:16）。多くの共同商店が赤字であるにもかかわらず経営を続けているのは、買物困難な高齢者の利便を図ることが目的だからだ。（宮城 2003:16）。高齢化が進んだシマを維持するためには、高齢者が利用しやすい共同売店の存在は大きい。奄美大島の大和村や宇検村にまだ共同売店（地域商店）が残っている要因も、基本的には沖縄と同様だと考えられる。

「奄美大島で共同商店がもっとも早く設立されたシマは、大棚であると考えられる。大棚はカツオ漁業と大島紬を基盤とし、戦前期には同じ大和村の今里に次ぐ規模のシマであった。」（『奄美もっと知りたい』P30）

1914 年（大正 3 年）、有限責任大棚購買組合が設立の許可を受けた。組合設立の原資は、共有林野の樹木を伐採して得られた販売代金であった。その後、有限責任大棚信用購買組合を経て保証責任大棚販売購買利用組合になり、さらに 1961 年に株式会社化され現在に至る。

共同商店が取り扱う商品は幅広い。例えば、大棚商店では、食料品・日用品はもちろん、建築資材や農機具・肥料、さらにはガソリンまで販売している。食糧員では、頻繁に買い物に行けない高齢者が利用する、缶詰やインスタント食品・冷凍品が主である。かつては保存

性のよい米やそうめんを名瀬や鹿児島から仕入れていたいずれの商店においてもとくによく売れる商品は酒・たばこであり、ろうそくや線香、学用品の品ぞろえもよい。

大棚には談話、喫煙、飲食のスペースが設けられ、住民の情報交換の場となっている。

「共同商店はコミュニケーションの場の提供、日常における声かけ・配達など、住民のコミュニケーション維持のため必要な機能を具備している。これらはシマにおける住民の行動規範、すなわち相互扶助を基盤とした機能である。作りだされた隔絶性により、取り残された高齢者たちの生活物資をまだ隔絶的ではなかった時代の産業資本や村落共同体が構築したシステムの遺産、すなわち共同商店が供給している。共同商店は公民館と同様、住民の公共財である。」（『奄美もっと知りたい』P30）

「共同店が有する村落共同体的機能を活用すれば、高齢者の生活の質を改善したり、災害時の対応拠点としての機能を、共同商店が提供することは可能であろう。すなわち、シマにおける共同商店の役割を再考することで、共同商店の存続可能性を見出すことができる。」（『奄美もっと知りたい』P34）

### 3-2 奄美大島・大和村・大棚地区人口の推移

| 年    | 奄美大島  |      |
|------|-------|------|
|      | 総人口   | 総世帯数 |
| 2013 | 1,644 | 875  |
| 2014 | 1,645 | 880  |
| 2015 | 1,593 | 866  |
| 2016 | 1,556 | 852  |
| 2017 | 1,516 | 861  |
| 2018 | 1,493 | 864  |

#### 地域別人口推移

| 年    | 国直  |     | 湯湾釜 |     | 津名久 |     | 思勝  |     |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|      | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 |
| 2013 | 124 | 58  | 100 | 50  | 158 | 81  | 136 | 65  |
| 2014 | 120 | 57  | 100 | 48  | 159 | 81  | 139 | 66  |
| 2015 | 113 | 59  | 100 | 47  | 149 | 76  | 134 | 66  |
| 2016 | 116 | 60  | 102 | 46  | 149 | 76  | 131 | 68  |
| 2017 | 114 | 64  | 100 | 45  | 140 | 76  | 131 | 70  |
| 2018 | 115 | 65  | 94  | 45  | 141 | 80  | 138 | 71  |

| 年    | 大和濱 |     | 大棚  |     | 大金久 |     | 戸円  |     |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|      | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 |
| 2013 | 276 | 131 | 287 | 155 | 97  | 53  | 131 | 108 |

|      |     |     |     |     |     |    |     |     |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|----|-----|-----|
| 2014 | 275 | 130 | 271 | 154 | 100 | 54 | 135 | 112 |
| 2015 | 269 | 131 | 259 | 150 | 91  | 50 | 128 | 107 |
| 2016 | 261 | 131 | 250 | 146 | 91  | 51 | 115 | 95  |
| 2017 | 250 | 135 | 248 | 146 | 92  | 55 | 105 | 90  |
| 2018 | 246 | 133 | 253 | 148 | 88  | 52 | 111 | 93  |

| 年    | 名音  |     | 志戸勘 |     | 今里  |     |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|
|      | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 | 人口  | 世帯数 |
| 2013 | 203 | 108 | 12  | 7   | 120 | 59  |
| 2014 | 208 | 110 | 10  | 7   | 128 | 61  |
| 2015 | 213 | 113 | 9   | 6   | 128 | 61  |
| 2016 | 207 | 115 | 8   | 6   | 126 | 58  |
| 2017 | 202 | 114 | 8   | 6   | 126 | 60  |
| 2018 | 196 | 113 | 7   | 6   | 104 | 58  |

### 3-3 奄美大島大和村大棚共同商店をめぐる女性たちの活躍

大棚商店の代表取締役を7年間勤め、村の地域女性団体連絡協議会の会長、「結の会」の会長も務める女性にお話を伺った。

彼女はもともと役場の職員であり、役場で働いている時代に共同商店の監査に入ったこともある。そして、商店のすべてを仕切っていた方が急死したため、役場を退職後、共同商店の理事に入った。任された当時、商店の経営がしっかりと管理されておらず、赤字であったことを知る。その後、3年かけてまずは台帳の整理をし、業者の言いなりだった仕入れ品を見直していったという。

大棚商店の大きな赤字の原因はツケであった。再建前のそのツケは六十数万円あり、その一方で、従業員のお金の使い込みなど、様々な問題を一から見直していった。

普段あまり使わない建築材などが何年も売れ残っているものがお店にあったり、検品を行っていなかったため、賞味期限切れの物を仕入れてしまったりなど、見直すものがたくさんあった。そして、安くてもよく売れるものを重視して置いたり、使うものを使うときに注文したり、期間限定で売れるものをその時期だけで仕入れたりして、お店に長い間商品を残さないように工夫することを心掛けた。

再建後、1年目では30万ほどの黒字を出し、株主にお米5kgを配当することができた。

大棚商店で主に売れるのは、おやつ・パン・飲み物。子どもたちの毎日のおやつはよく売れるそうだ。そして、若い青年には、酒・たばこが一番売れる。中でもたばこは月で50～60万の売り上げを出す。

大棚集落の敬老会や豊年祭のときに食べ物や飲み物を大棚商店で買ってもらうようにしているが、大棚には、個人での商店をやっている方もいるため、飲み物は大棚商店、食べ物は個人商店というような「住み分け」も行っている。

そして、2011年(平成23年)8月。「結の会(むすびのかい)」を結成し、集落内にオープンした、本格的な調理施設である「大和まほろば館」を利用して週3回ワンコイン惣菜を販売している。「結の会」は10名のメンバーで活動をはじめ、現在は6名で活動をしている。

惣菜は、主に高齢者が自宅でなかなか作る機会のない揚げ物や油そうめんなどを作ったりしており、はじめのターゲットは高齢者であったが、自宅であまり自炊することがない独身男性などにもとても人気がある。総菜を作ることによって新たな地域ニーズの発見にもつながった。

お惣菜は1日1品15点くらい作っており、メニューは5品ある。お店でも売っているが、要望を受け、村が運営するマイクロバスを借りて役場での販売も実施した。

始めた当時は1日500円としてお給料を出していたが、現在は1回1,500円で活動を続けている。こういった活動はボランティアでは続かないからだ。1,500円というのは「日当」「賃金」としては安価であるが、「気持ち」「楽しさ」という観点からは高価である。そこに「地域のために頑張った」という充足感とちょっとしたお小遣いで子どもや孫に何か買ってあげられるという満足感が生まれるのだ。

もちろん、この惣菜で使う野菜は、大棚商店から買った野菜を使い、時には、おばあちが作った野菜の中で形が悪く売れない野菜を使ったり、自分たちで野菜を作ったりもした。毎日この惣菜を作って売ってほしいという声もあったそうだが、週に何回かでも仕入を考えると時間がかかってしまう。また、ターゲットを絞った販売のため、他店との競争もなく、今が無理のない範囲での活動となっている。

多くの共同売店がそうであるように、大棚商店にもは、買い物ついでに談話ができるスペースが設けられている。そこにはいつもおばあちが集まり、他愛のない会話をしている中から、「大棚花会(はなかい)」という大きな団体が結成された。

大棚の高齢化が進んでいく中でも、高齢者にもできること、やりがいのあることを工夫して行動する力を女性たちは持っている。

#### 第4節 地域活性化の核としての女性

以上、3つの事例から、女性の柔軟な考えに触れることができた。なぜ女性はこれほどまでに柔軟に物事に対応できるのだろうか。

女性は、良し悪しは別として、現実的に仕事と家庭が切り離せない。それはこの共同売店という職業だけには限らないが、協同売店の場合、客としてお店を利用する自分もいれば、経営者として関わる自分もいる。どちらの共同売店も、生活と仕事が結びついている部分をうまく生かして経営している。

また、男性女性に限らず、地域の特質を生かすことができる人材がその地域にいたということも重要である。地域リーダーの存在は不可欠である。

一方で、地域に嫁としてやって来た女性や、Iターンの女性には、都会で仕事をした経験があるからこそ、出来るスキル、例えばインターネットを駆使して安く商品を仕入れるなどが可能になる。社会に出て仕事をしたからこそ、新しいことに取り組んでも、物事の進め方の枠をとらえ、次に何をすべきかを計画できるという力があるのだ。

そして、なによりも、女性の場合は、（結婚などの）ライフスタイルの変化に比較的柔軟に対応できる能力が高い人が多いからこそ、その時の自分の色々な立場を利用した視野で考え行動することができるのではないだろうか。

共同売店の運営に関しては、基本的なことを当たり前に行うことがまず重要である。

廃棄された商品の一覧表を細かくつけて商品を管理したり、お客さんのニーズをチェックしたり、商品が目につきやすいお店のレイアウトを考えるなど、本当に基本的なことが実行されていた。そのうえで、何をしたら地域のためになるのか、何か楽しいことはないか、みんながやりたくなることはないか、という義務ではなく楽しみながらやることで周りが理解し、ついてくる。そういう点も、男性に比べ女性たちが得意とするところだ。

女性たちが、当たり前に行っていることの中にこそ、例えば共同売店の活性化のヒントがある。それをまとめてみる。

- ① コンビニのように『今すぐ必要なもの』と『高くても買ってしまうもの』が置かれている店
- ② 100円ショップのように『ここに行ったらあるかも…と思える』お店
- ③ スーパーのように『いつもここに行ったらあるもの』が置いてある店

車を少し走らせれば安くていろいろな物が手に入れられる世の中になってきている反面、地域のためのお店であり、地域になくはならないお店でいるためには、共同売店自体も時代とともに変わっていかなくてはならないが、その原動力はやはり女性の方が有利だと思われる。

### 第3章 「地域の教育力」とは何か

那覇市では、こどもみらい部に子育て応援課をおき、さらにその下に子育て支援室を組織している。

子育て支援室には、室長・主査1人、主査保健士1人、主事（行政職・社会福祉士・臨床心理士）3人、家庭相談員（非常勤）8人、子育て世帯自立支援員（非常勤）1人、育児支援専門員（非常勤）2人、乳児全戸訪問担当保健師（非常勤）1人、乳児全戸訪問活動支援員（非常勤）1人、合計19人の職員数で業務を行っている。さらに、「こんにちは赤ちゃん訪問員45人の体制である。

その事業内容は以下の通りである。

- ① 要保護児童対策地域協議会事業（児童虐待の未然防止）
- ② 家庭児童相談事業（児童の福祉向上）
- ③ こんにちは赤ちゃん事業（子育て家庭の孤立や産後の鬱病予防）
- ④ 育児支援家庭訪問事業（育児負担の軽減のための指導）
- ⑤ 短期入所生活支援事業（ショートステイ）

（那覇市子育て支援室提供資料より）

さらに、最近話題となっている児童虐待防止に向けての取り組みもかなり熱心に行っている。ちなみに、那覇市における家庭児童相談件数は平成29年度において864件（児童虐待相談249件、うち虐待通報件数38件）である。

極めて単純化して表現するのならば、かつて「地域」が行っていた「子育て支援」を行政が行わなければならないというのが、都市における子育ての難しさである。

しかし、その一方で、第1章で述べられているように、医療に関しては北部地域や離島においては大きな困難を抱えている。また、医療だけでなく、心理的、発達的な問題に対応できる専門家という点でも、北部や離島が恵まれた環境だとは決して言えないのが実情である。

北部や離島における地域の教育力や女性が活躍できる場の存在は大きい。そういう地域を訪れると、地域（集落）の大人が子どもたち全員の名前を知っており、子どもはいつでも声をかけられ、励まされ、時には叱られている情景を見ることができ、まさに、地域ぐるみで子育てをしているという感が強い。

理想的なことを描くとすれば、離島などに病院や教育相談施設を作ると同時に、都会に子育てを支援できるコミュニティーを形成していくことが望ましい。

しかし、前者は過疎化に伴う財政の問題が根本にありその実施は困難である。むしろ、医学的にも教育的にも「予防的」な政策の方がより効果的だと言わざるを得ない。

その一方で、那覇市を中心に都市地域でも、例えば小学校区域に行政がリードして新たな形のコミュニティーを形成していこうという動きも活発化している。しかし、現状ではそれもまだまだ大きなハードルが存在している。それは、無関心である住民が多いことも大きな要因ではあるが、従来からある自治会との関係をどう築いていくかというハードルでもある。

那覇市は、現在においても全国で最も自治会の組織率と加入率が低い県庁所在地である。その要因は、沖縄や奄美特有の「郷友会」（きょうゆうかい）（奄美ではごうゆうかい）にあるということをおはかつて分析したことがある。

戦後焼け野原から立ち上がった那覇市には、仕事を求めて多くの人たちが急激に移住してきた。移住者はまず、自分の出身集落の「先輩」を頼って来る。出来るだけ近くに住居を構え、次第に在那覇郷友会を結成していく。現在でも「〇〇地域には△△出身者が多い」と言われるのはそのためである。

例えば、第2章でも紹介された奥部落でも、現在那覇市の2か所に寄り添うように住んでいる。そういった在那覇郷友会は自治会あるいはそれ以上の役割を果たしてきた。新年会のトシビー祝いから学事奨励会、運動会、演芸会のみならず、毎月のもあい、郷友会としての積み立てとそれを使った旅行、経済的に困った会員への支援や貸付、仕事の紹介など、様々な相互扶助を行ってきたのである。奥郷友会は、那覇市識名に郷友会の共同墓地まで建設し、まさに、「ゆりかごから墓場まで」助け合う団体である。

そういった互助組織である郷友会があるために、那覇市においては、北部や離島から移住してきた者が那覇市の自治会に入る必要はなかったのである。その一方で、元々の那覇市の地域自治会も厳格に地元民と寄留民（よそ者）を区別し、加入を希望しても自治会に入れないという地域も少なくなかった。「申し込みもしていないのに自動的に自治会に加入させられた」ことが問題になるような他県とは対照的なのが沖縄の都市地域の特徴である。

おそらく1960年代頃までは、那覇市においても、本稿の第1章や2章で紹介された地域の現在よりも、より強い相互扶助的な機能を郷友会や地元の自治会は有していた。

しかし、那覇に移住してきた人を郷友会の一世とすると、すでに現在は3世4世の時代

である。かれらは子どもの頃に郷友会の行事に親に連れて行ってもらった記憶はあっても、郷友会の会員にはならない。すなわち、郷友会一世の最年少が60代であることを考えれば、郷友会も風前の灯なのである。現実には、現在那覇市で活動している部落単位の郷友会は奥くらいであり、その内容も懇親会的な要素がほとんどである。国頭村全体の郷友会「北斗会」はまだまだ活動は続くであろうが、これもすでに懇親会的な組織である。

以上のことから、沖縄県の県都である那覇市は、他の都市以上に子育て支援や子どもの貧困対策に行政的に関与するを得ない。しかし、そこには財政の壁が厚く存在している。そこで「地域による子育て支援」機能を活性化するための政策が打ち出されているのである。

「地域の教育力」を強化しようと言うのは簡単である。しかし、最近は特に「学識経験者」と言われる人たちが安易にその言葉を使いすぎるのではないだろうか。

「地域の教育力」とは何かを考えるためには、現在でもその教育力を発揮している地域からより具体的に学ぶことが最も重要である。本稿の第1章と第2章でその事例をある程度具体的に示せたのではないかと思う。

微かにわかりかけたことは、第1章から理解できるように、子どもたちが「地域」への愛着がもてるような仕掛けを作ることである。そうすることによって、実は、地域が子どもを育てる一方で、子どもが地域の「鎧」となるのである。

そして、第2章から読み取れるように、女性が活躍しやすい環境を作ることである。沖縄では相変わらず地域の行事においても女性は「縁の下の力持ち」的な存在であるが、これからはむしろ女性を前面に出すことによって、あるいは女性がリーダーになることによって、子育てしやすい地域にもなっていくだろう。

もちろん、北部や奄美や沖縄の離島はいいことばかりではない。しかし、問題をかかえていない地域は存在しない。我々は、「地域の教育力」という言葉を安易に使うことを控え、より具体的、より現代的に物事を考える必要がある。

例えば、自治会や婦人会、子ども会という組織は、一部のリーダーの献身的な努力によって支えられていることが多く、そのリーダーがいなくなれば組織自体が消滅してしまうことも少なくない。さらによく言われるように、日本社会の「誰かに任せて文句を言う社会」という特徴が根底にあって、リーダーは褒められることよりも文句を言われることの方がはるかに多い。

そのようなことを乗り越えるには、沖縄に根強く残る潜在的な「男尊女卑」的な価値観を乗り越えると同時に、新たな発想で地域を作って行かなければならないだろう。

すなわち、「誰かに任せる」のでもなく、「義務や責任感」で役員になるのでもない方法である。その一つに現在注目されている「ボランティア型」の地域活動参加があげられるだろう。

ある一定期間自分のことや家族を犠牲にしなければできない活動ではなく、できる人ができる時に協力できるシステムの構築である。その時最も大切なことは、「楽しく参加できること」というのはもはや地域活動の常識になりつつある。

その際、基本となるのは、やはり、その地域の特性を知り、他の地域の活動を学び、その地域にあった教育力を作ることである。それは、「地域の教育力の向上」などという一般化された言葉でくくれるようなことではない。

この研究は、地域の人たちと直接に関わりをもちながら、時にはお手伝いをしながら、時

には私や学生がお世話になりながら、そして絶えず一緒に議論しながら続けていきたいと  
かんがえている。

おわりに

今回の調査には、数多くの人たちにお世話になりました。私が十数年あるいは数年通って  
いる地域だとはいえ、私や学生たちの質問やお願いに快く答えてくれた方々に改めて感謝  
の意を示したいと思います。ありがとうございました。

〈参考文献〉

西表島の共同売店・一般商店 [http://www.zephyr.justhpbs.jp/iriomote\\_kyodo\\_store.html](http://www.zephyr.justhpbs.jp/iriomote_kyodo_store.html)

ウィキペディア南風見仲 <https://ja.m.wikipedia.org/wiki/南風見仲>

大和村 移住・定住ガイドブック

<http://www.vill.yamato.lg.jp/hpkanri/curashi/jju/documents/jjyuguide20180423.pdf>

田舎暮らしの本 2016年10月号

うるま(112号) 西表島ジャングル日和

沖縄スタイル 2005年5月10日発行 「座談会 沖縄で育つと子供は幸せ？」

沖縄・奄美のお勧めビーチ・展望台からグスク・御嶽まで何でも紹介します。ハイヌミカゼ

<http://www.hainumikaze.com/kunigami/yona.html>

奥のあゆみ刊行委員会(1988)『字誌 奥のあゆみ』奥のあゆみ刊行委員会編

神谷裕司(1997-1998)

『奄美、もっと知りたいーガイドブックが書かない奄美の懐』南方新社。

須山聡編著(2014)『奄美大島の地域性ー大学生が見た島/シマの素顔』海青社。

宮良作・宮良純一郎(2017)『与那国島誌ー東アジアの南向き玄関口』南山舎。

池間栄三(1959-1984)『与那国の歴史』発行者池間苗

宮城能彦(2003)『村落と共同店』沖縄大学研究所所報

宮城能彦(2015)『共同売店の可能性』沖縄大学 宮城能彦研究室